梅溪（うめたに）は城山の北にして、五郎太町（ごろたまち）、福寿菴、大亀谷、八科嶺まで初春の清香四方に薫り、雪蕚霜葩艶しくして瘦枝に花婉々たり。これを賞して洛下の騒人千もとの陰に余寒の烈しきを忘る、羅浮の夢何遜が題咏、万斛の香を儲て天下の春に魁すとは東坡の辞なり。

風香雪白大亀溪。　千樹梅花東復西。　龍公美

若使林逋知此地。　孤山春静銷幽栖。

荒丘断壟旧金湯。　路入梅花春渺茫。　六如菴

斉是羅浮林下夢。　笑抛盞酬猿郎。

梅遠近南すべく北すべく　蕪村

梅が香やことに月夜の面白く　かゞ千代

仇を恩にて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るや梅花　同

我袖のわが袖ならずむめの花　浪花大江丸

眼のさめる伏水のむめのさかりかな　同二

梅が香や山も葛屋も動くかと　八十一叟嘯山

むめのはなあの月ながら折ばやな　惟然

むかしみし夜のおもむきや梅の月　定雅

都林泉名勝図会巻之三終